

その程度は TAE 群で著明だった。以上より、TAE の方が SMANCS よりも急性肝障害の程度は強く、CA/CDCA は治療後の肝障害を示す指標になりうると考えられた。

10) 胆石流産を内視鏡的に観察し得た肝膿瘍を伴う総胆管結石の 1 例

○相川 啓子・豊島 宗厚 (日本歯科大学)
曾我 憲二・前田 裕伸 (新潟歯学部)
柴崎 浩一 (内科)

症例は67才の男性。昭和61年8月、発熱、腹痛が出現し近医に入院。胆管結石の疑いで保存的療法を受け症状は改善した。同年11月、黄疸を伴った同様の症状が出現し改善したが、昭和62年6月5日から再び発熱、黄疸、右季肋部痛が出現し6月17日に当科に入院した。入院翌日、午前中に施行した内視鏡にて十二指腸乳頭部に結石嵌頓所見が観察され、午後乳頭括約筋切開術を目的として再施行した内視鏡にて、結石流産後と思われる裂溝状の乳頭開口部の開大所見が観察された。同時に臨床所見、各種検査所見の改善を認め、昭和62年6月にCT、エコーにて出現を認めた肝右葉前上区域の数コの肝膿瘍も8月5日には消失した。以上、総胆管結石の胆石流産を内視鏡的に観察し得た興味ある症例を報告した。

11) 内視鏡的乳頭括約筋切開術前後における胆管内圧の測定

○吉永 輝夫・長又 則之
千島 丈一・金丸 稔 (群馬大学第一内科)
五十嵐 健・星野次郎
樋口 次男・小林 節雄

内視鏡的乳頭括約筋切開術 (EST) の総胆管内圧に及ぼす影響を検討する目的で、総胆管結石症 4 例に対し EST 施行前後の総胆管内圧及び十二指腸内圧を測定した。内圧測定は経内視鏡的に 4 Fr マイクロトランスデューサーカテーテルを用いて、EST の直前と 1~2 週間後に行われた。総胆管内圧は、EST の前後でいずれも十二指腸内圧より高く、総胆管十二指腸内圧較差の平均は EST 前が 7.1mmHg、EST 後が 2.1mmHg と EST 後に減少する傾向を認めた。

12) 急性閉塞性化膿性胆管炎 (AOSC) に対する内視鏡的緊急胆道減圧

○西島敬之郎・今 陽一
木村 徹・萩原 廣明
青木 隆・増田 淳 (群馬大学第一内科)
園部 光一・善如寺恵子
樋口 次男・小林 節雄

AOSC は今日にてもその死亡率は高いが今回我々は

総胆管結石の嵌頓による AOSC 13 例 (男 7 例, 女 6 例, 平均年齢 65 才) に内視鏡的乳頭括約筋切開術 (EST) を用いた内視鏡的経鼻経胆管ドレナージ (ENBD) もしくはバスケット鉗子による排石という胆道減圧術を行い全例を救命しえた。臨床症状の改善は劇的で、術後すぐに腹痛消失し、下熱傾向が認められた。又白血球数は 2~3 日後、総ビリルビン値は 1 週間前後で正常化した。合併症として特に重篤なものはなく 1 例に EST に際し小出血を認めたが自然止血した。この方法の有用性につき考察を加え報告する。

13) 胆石症手術例の術中術後シネ胆道造影所見及び胆汁内胆汁酸の検討

○清水 武昭・大村 康夫 (信楽園病院外科)
佐藤 攻
中沢 俊郎・塚田 芳久 (同 内科)
村山 久夫
畠山 重秋 (新潟通信病院内科)

昨年 1 月より本年 8 月までの胆石症手術症例 52 例について、多くのパラメーターを設け検討してみた。胆嚢結石症 38 例、総胆管結石症 14 例であった。これらの症例に術中術後胆道造影を透視下で動的に観察した。胆汁内成分では、胆汁酸、細菌数、白血球数等を測定した。乳頭部の運動では十二指腸と深い関係を認めたが、他の所見とは関連がなかった。胆汁酸やリンパ球、血小板、流量等の多い症例は胆道系の末梢までよく写り、総胆管の太いもの、乳頭部の形の線条型、胆汁内細菌の多いもの、A-L-P、残圧の高いものは末梢まで造影されなかった。総胆管系も同様で、胆汁内細菌の多いものは太く、胆汁酸濃度の高い症例は細い傾向があった。症状の激しい症例ほど総胆汁酸は低くなるにも関わらず、free の胆汁酸濃度は上昇していた。胆汁鬱滞、感染症などが胆石症を重篤化させる因子と考えられ、乳頭部シネ所見との関連はえられなかった。

特別講演

我国の胆石症の特徴

東京慈恵会医科大学第一内科教授

亀田 治男先生